

ルワンダ大虐殺後の 和解と共生の 歩みを支援する

佐々木和之

REACH(ルワンダ平和構築NGO)
「修復的正義と和解」プログラム担当職員

ささき かずゆき ● 1965年、横浜生まれ。鹿児島大学農学部卒業、コーネル大学国際農業・農村開発修士課程、ブラッドフォード大学平和学博士課程修了。国際NGOの職員としてエチオピアの農村開発に従事したのち、05年からルワンダで平和と和解のプロジェクトを展開



戦争によって開発協力の成果が
もろくも崩れ去るのを見た

緑の丘が幾重にも連なり、「千の丘の国」と呼ばれる美しい国ルワンダ。この国に家族とともに移り住んでから5年目になる。「なぜルワンダに？」と



大虐殺から15年を経て、ルワンダでは未だに犠牲者の埋葬式が続く 写真提供：筆者（以下も同じ）

よく問われるのだが、それは、大虐殺後の和解と共生という、不可能とも思える課題に向き合い、懸命な努力を続けているこの国の人々から希望をもらってきたからにはかならない。

私は大学卒業後、1988年からの

べ12年間、国際NGOの職員として、エチオピアの農村開発に従事した。91年までは、30年間続いた内戦の戦況を見極めながらの活動であった。北部の活動地にまで戦火が及び、撤退を余儀なくされたこともあった。98年には、エリトリアとの間に国境紛争が勃発。戦闘は激烈を極め、双方の死傷者は10万人に達した。

私の活動地域からも、若者たちが強制的に戦場に送りこまれるようになっていった。せつかく積み上げてきた開発協力の成果が、戦争によってもろくも崩れ去るのを目の当たりにした。そんななか、ストリートに紛争と平和の問題にアプローチできる仕事があったと考えるようになったのだ。

聞き取り調査のあと、現地NGOの一員として活動を始めた

ルワンダを初めて訪れたのは、エチオピアでの任期を終える直前、2000年5月のことであった。到着の翌日、全国各地に点在する虐殺記念施設の一つに出かけた。それは、ツチの避難民の殺戮の舞台になった教会だった。「教会に行けば、助けてもらえる」と思って逃げ込んだ数千もの人たちが、乗り込んできたフツの民兵たちにはほ



ルワンダ第二の規模の都市ブタレ近郊のギコンゴロにある虐殺記念施設では、犠牲者の亡骸が残されている



ルワンダ共和国は中部アフリカにある面積の小さな国。内戦から1994年には大虐殺が起こり、100日で80万人以上の人命が失われた。現在、国の再建が進み、鉱物資源やコーヒーなどの輸出も増加してきた

皆殺しにされたのだ。教会の内壁にはどす黒い血糊がべつとりと付いていた。それは、幼い子どもたちがツチであるというだけの理由で、頭蓋を叩きつけられて殺された場所だった。飛び散った血糊は天井や床にも黒いシミとなって残り、犠牲者の遺骨が放置された地下室には死臭がたちこめていた。私は、「このよなことが起きてしまった国で、人々が共存していくことなど不可能なのではないか」との思いを抱きつつ、その殺戮現場となった教会を後にした。

それ以来、私はルワンダに毎年のように足を運ぶようになった。将来の平

和構築分野での活動に備えるため、イギリスの大学院に留学した私は、博士論文の研究テーマをルワンダ大虐殺後の正義と和解の問題に絞り、草の根の人々から聞き取り調査を始めた。

調査期間中、「この調査が私たちにどうして何のためになるのか」という質問を繰り返し受けた。そのたびに私は、「この調査のあと、平和と和解のための活動を立ち上げたいと思っている。そのためにも、現在のルワンダの状況をよく理解することが必要なんです」と言い続けた。

それに心えて、多くの人たちが、彼らの凄惨な体験、怒り、やりきれない思い、そして希望について語ってくれた。そんな数年間を過ごしたのだから、大学院での研究を終えたあと、ルワンダで働くことは自然の成り行きであった。

しかし、ある一つの国で、自分で決めた目的のために、長期間取り組みさせてくれる平和構築の仕事はそう存在しない。そこで、学生時代からお世話になってきたキリスト教会の牧師の方々に思いを打ち明け、日本で支援グループを結成してもらうことになった。約1年がかりで「ルワンダ人による平和と和解の取り組みを支援する」という

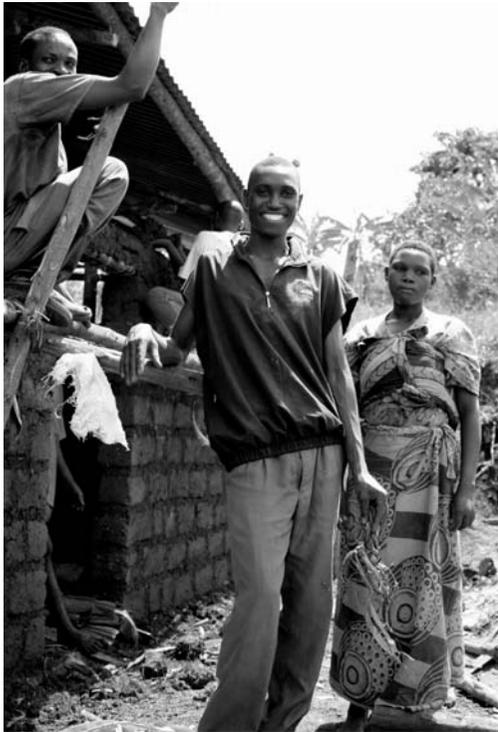


「癒しと和解のセミナー」で虐殺犯を赦す被害者たち

趣旨に賛同して下さる方々を募った。05年に準備が整い、4年来の付き合いであるルワンダ人の牧師が創設した現地の平和構築NGO「REACH」の一員として活動を開始した。

加害者が被害者の家族のために家を建てるプロジェクト

わずか15年前の1994年、大虐殺という巨大な暴力を経験したこの国の人々にとって、「和解」とは限りなく重く厳しい課題である。犠牲者の数は少なくとも80万人、当時の人口740万人の9分の1に当たる。主な標的にされたエスニック集団であるツチの75%



家づくりの現場で笑顔
を見せる受益者夫婦

が惨殺された。一方、殺人や傷害等
で有罪判決を受けた虐殺加害者（そのほ
とんどがフツ）は約35万人と見られる。
国民融和政策を掲げる現ルワンダ政
権は、これらの虐殺犯のうち、自白した
加害者の刑期を大幅に軽減し、拘禁刑
の代わりに公益奉仕労働刑に従事させ
たあと、地域社会へ復帰させる方針を
取っている。

ルワンダはアフリカで最も人口密度
の高い国であるとともに、フツもツチ
も数世紀にわたって同じ地域に混在し
て暮らしてきた。そのため、被害者側
と加害者側の人々が、別々の地域に住
み分けることは不可能だ。ルワンダは

今、虐殺の当事者同士が再び同じ村や
町で暮らさなければならぬという、
想像を絶する困難な課題に直面してい
るのである。

今から2年前、私はルワンダ人の同
僚たちと一つのプロジェクトを立ち上
げた（詳細は *rwanda.wakaine* を参照）。
それは、自白による減刑処分で公益奉
仕労働刑を科された加害者が、被害者
の家族のために家を建てるプロジェク
トだ。

そのきっかけは、REACHが大虐
殺後の心の癒しと生活再建のために支
援してきた女性グループのメンバーの
なかに、劣悪な居住環境に置かれてい
る人々が多数いたことだった。彼女た
ちの多くは、大虐殺当時に家を破壊さ
れ、それを再建できずにいたのだ。そし
て、加害者からの真摯な謝罪とできる限

りの「償い」を求めていた。そこで、公
益奉仕労働刑の受刑者による「償いと
しての家づくり」を始めるのはどうだ
ろうと提案し、女性たちの賛同を得た。

そこで、私たちはプロジェクトへの
参加を希望する受刑者たちを対象に学
習会を実施した。そのなかで、受刑者
たちに被害者の証言を直接聴く機会を
与え、罪の自覚を深めてもらうように

努めた。

殺戮に参加した大多数の加害者は、
それまで犯罪歴などない「普通の人々」
であった。ツチを徹底的に非人間化す
るイデオロギーを擦り込まれ、また、
体制側に立たなければ自分が殺される
かもしれない、という恐怖心に駆られ
て残虐行為に手を染めたのだ。

「ゴキブリを叩き潰せ！」というスロ
ーガンが連呼される状況のなか、あた
かもモノであるかのように山刀で斬り
つけた相手が、自分自身と同じように
人格を持った生身の人間であったとい
うことを感じ取ること、被害者の痛み、
悲しみ、そして無念さを少しでも心で
受け止めることから「償いの家づくり」
が始まるのである。

真の和解と共生に至る 長い道のりを支える

プロジェクトに参加した虐殺加害者
はこれまでに200名を超え、25軒の
家が完成した。大半の参加者はすでに
刑期を終え、自分の村で家族との生活
を再開した。しかし、彼らの償いはま
だ終わっていない。

2カ月前のこと、「償いのプロジエク
ト」OBたち50名を対象にした学習会
のあと、タデヨさんという元受刑者か



自主的な家づくりに取り組む元受刑者たちと受益者のヴァレリヤさん

ら手紙を受け取った。そこには、私たちの働きかけにより被害者側の人たちと言葉を交わせるようになったことへの感謝と、同じ村で粗末な小屋に住んでいる虐殺生存被害者の女性のために、仲間と一緒に無償で家づくりに取り組むみたいとの思いが綴られていた。

かくして、プロジェクトOBたち15名による自主的な家づくりが始まった。農民である彼らは、週に3日間家づくりに取り組み、残りの3日間を農作業にあてている。家づくりの受益者選ばれたのは、虐殺により夫と二人の子どもを失い、家族でただ一人生き残ったヴァレリヤさんだ。虐殺のあと、ある男性に第二夫人としてかこわれ、二



日干し煉瓦での家づくり

人の子どもを儲けたが、のちにその男性が失踪、今は子どもたちと一緒に直径3メートルにも満たない雨漏りのひどい小屋に住んでいる。

先日、日本からの数名の来客とともに家づくりの現場を訪問し、ヴァレリヤさんから話を聞いた。「これで雨漏りの心配もいらない。彼らには本当に感謝している」と語る彼女の表情はまだ硬く険しかった。その彼女に、「あなたにとって何が希望ですか」と来客の一人が尋ねた。すると彼女は一言、「この光景が希望です」と答えた。彼女と私たちの前では、元受刑者たちがきびきびと作業を続け、その周りでは近所の幼い子どもたちが砂遊びやまり遊びに興じていた。

ルワンダで紛争が再燃しないとの保証はどこにもない。この国の人々は、これからも真の和解と共生のために長い道のりを歩んでいかなければならないだろう。想像を絶する深い悲しみを負いながら、それにもかかわらず前を向いて生きている人々への支援を続けていきたい。彼らが灯している希望の光を決して消してはならない。その希望が、次の世代のルワンダを担う若者たちにしっかりと受け継がれていくように。☺